

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Central serous chorioretinopathy with and without steroids: A multicenter survey

(中心性漿液性脈絡網膜症とステロイドの関連における多施設後ろ向き観察研究)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学 専攻 高次神経制御 系

眼科 学 (指導教授 五味 文)

氏 名 荒木 敬士

目的: 中心性漿液性脈絡網膜症 (central serous chorioretinopathy : CSC) は、網膜の黄斑部に漿液性網膜剥離が生じ、歪視や変視などの視機能異常を呈する疾患である。自然軽快が多いとされているが、再発を繰り返すことも少なくなく、遷延する場合には高度の視力低下をきたしうる。発症要因としては心身のストレスや喫煙、内用または外用ステロイド薬などの関連が示唆されてきたが、日本人における多数例での検討は行なわれていない。我々は、本邦の多施設での CSC 症例における患者背景や特徴につき、特にステロイドとの関連に注目して、後ろ向きに調査し検討した。

対象: 対象は、2013年4月から2017年6月までに臨床網膜研究会 (JCREST) 参加施設内を受診した CSC 症例のうち、光干渉断層計、フルオレセイン蛍光眼底造影 (FA)、インドシアニングリーン蛍光眼底造影 (IA) を撮影でき、3か月以上経過観察が可能であった 477例 538眼 (男性 344例、女性 133例)。患者データは後ろ向きに診療録から抽出し、年齢、性別、等価球面度数、中心窩脈絡膜厚、FA における leakage point の数と場所、IA における透過性亢進の有無、ステロイドの投与歴、喫煙歴、抗不安薬の内服歴について検討した。主要評価項目をステロイド関与の割合、副次項目をステロイドの有無 (S+群・S-群) による病型の差異とした。

結果: 74例 (15.5%) (男性 39例、女性 35例) でステロイドが使用されていた。S-群と比較し S+群では、平均年齢が高く ($p=0.0403$)、男性の優位性はみられず、両眼性の割合が有意に高く ($p<0.0001$)、喫煙歴は優位に低く ($p=0.0345$)、抗不安薬の内服歴は高かった ($p=0.0016$)。また、複数の網膜色素上皮剥離を認め ($p<0.0001$)、FA における漏出点の数が有意に多く ($p<0.0001$)、中心窩脈絡膜が厚く ($p=0.0287$)。等価球面度数に有意差はなく ($p=0.1920$)、IA における IA での透過性亢進には有意差はなかった ($p=0.1274$)。

結論: ステロイドの有無により CSC の特徴に明らかな違いを認めた。ステロイドは、脈絡膜血管へ直接影響を与え CSC を引き起こす可能性が示唆された。